

【論 文】

カルカニーニの「リネラエオン」とパンタグリュエリオン —航海術と帆布を巡って

Le *Linelaeon* de Celio Calcagnini et le pantagruélion
—Autour de la voile et de la navigation

関 俣 賢 一
SEKIMATA Kenichi

目 次

0. はじめに
1. カルカニーニと「リネラエオン」について
2. 帆布の作成と航海術
3. 『アスクレピオス』の科学技術論
4. マルシリオ・フィチーノによる伝播
5. 不滅性の獲得
6. プリニウスとポリドーロ・ヴィルジリオ：帆布の二重性
7. おわりに

要 旨

本論はラブレール『第三の書』の末尾を飾るパンタグリュエリオン草賛美の挿話が、フェッラーラの人文主義者カルカニーニの作品「リネラエオン」から受けた影響の一端を明らかにし、航海術と帆布を巡る科学技術的な創意性の射程を探るものである。

カルカニーニの「リネラエオン」は三部構成になっており、これはパニユルジュの結婚問題を巡る『第三の書』の構成に対応しており、前者から後者への影響が窺われる。「リネラエオン」で描かれる霊草の亜麻はパンタグリュエリオン草のように不燃性のものとして描かれていないが、ラブレールはここに自然魔術に属す燃えない亜麻の記述を接木し、独創的な挿話をものした。両作品において霊草は、魔術的な力を持ち科学技術を発達させ人間社会を進展させる共通点を持っている。管見によればこうした肯定的な自然観は「ヘルメス文書」の『アスクレピオス』から来ており、フィチーノへと受け継がれ、人間精神の創意性賛美に至る。これが「リネラエオン」と『第三の書』に通底する思想的基盤である。

この積極的な自然観はパンタグリュエリオン草の性質を考察する材料として重要である。パンタグリュエリオン草は紡織術により帆布を創出し航海術を生み出すが、今までこの帆布は人類を危険な航海へと導く悪しきものとして批判されパンタグリュエリオン草は否定的な属性を持つと評されることが多かった。こうした否定的な見方はプリニウスやポリドーロ・ヴェルジリオに基づいている。勿論ラブレー的な逆説的礼賛の常として否定的な属性は重ねられてはいるが、しかしながら『アスクレピオス』やフィチーノを経た「リネラエオン」の影響の下にあるパンタグリュエリオン草は否定的属性を最終的に乗り越え称賛されるべきものであると見做すことが出来る。

0. はじめに

フランス・ルネサンスの巨匠フランソワ・ラブレーの『第三の書』を締めくくるのは謎めいた植物であるパンタグリュエリオン賛美の挿話である。ラブレー作品全体に言えることだが、この挿話を書いた作者の意図といったものは未だ解明されておらず、様々な解釈が試みられてきた。微妙な力点の置き方に違いはあれ、最も有力な説であったのは挿話を人類の進歩に対する賛歌と見做すものである。ヴェルダン＝ルイ・ソーニエは、その他の様々な解釈とともに、如何にもルネサンス的なこの説に賛同する1956年迄の研究を手際よくまとめている¹⁾。ソーニエ自身はこの挿話に宗教改革期における韜晦された福音主義を読み取っており、この説は渡辺一夫の紹介により日本でもよく知られているものである²⁾。その後も数多くの解釈が提示され続けており、霊草パンタグリュエリオンの背後に、例えば、反ペトルカ主義的な月桂樹の姿や、賢者の石の錬成過程、書物の隠喩などを見出す論者がいる³⁾。

解釈に新機軸を打ち出そうとするこうした試みは、それ自体がラブレー作品の豊穡さに与しており意義深いものである。だがどのような解釈を提示するのであれ、その前提となる事実（特に見過ごされがちであったそれ）を確認しておく必要があるだろう。本稿の目的は、パンタグリュエリオン賛美の挿話をチェリオ・カルカニーニという人文主義者が執筆した「リネラエオン」と比較し、この二作品の共通基盤となるヘルメス思想の影響を明らかにすることにある。

まず我々は（特に本邦では）余り知られていなかったカルカニーニの伝記とラブレーとの関係について述べ、「リネラエオン」の内容とラブレー『第三の書』の構造の類似について概観した後に、「リネラエオン」とパンタグリュエリオン草賛美の挿話の具体的な分析に移ることとする。

1. カルカニーニと「リネラエオン」について

カルカニーニはフェッラーラ公であるエステ家に仕えた人文主義者である。エステ家はフランス王国と深い関係にあった。1528年にフランソワ一世の義妹であるルネ・ド・フランスが、フェッラーラ公エルコレ二世と結婚したことを看過してはならない。ルネ・ド・

フランスは、フランス国王ルイ十二世とブルターニュ女公の王妃アンヌ・ド・ブルターニュの次女で、姉のクロードはフランソワ一世の王妃である。ルネはプロテスタントに親和的な傾向があり、クレマン・マロが1534年の檄文事件の後にフェッラーラへ亡命し、後にカルヴァンも彼女を頼ってその宮廷に身を寄せることになる。マロとカルカニーニは実際に交流があった⁴⁾。ラブレーは二度のイタリア旅行の際に、庇護者であるジャン・デュ・ベレーとともにルネの宮廷を訪れ、当地の人文主義者ジョヴァンニ・マナルドやリリオ・グレゴリオ・ジラルディと共に、カルカニーニと交流を持ったと言われている⁵⁾。カルカニーニの作品は死後に『作品集』としてまとめられ1544年に出版される⁶⁾。

各校訂版の諸註を見れば明白な通り、ラブレーがカルカニーニの『作品集』に親しみ創作源の一つとなっていることは確実である⁷⁾。しかしながら、今回採り上げる「リネラエオン」との関係について論じた研究は決して多いとは言えなかった。確かに「リネラエオン」が与えたパンタグリュエリオンの挿話への影響についても、既にスタンレー・エスキんとマイケル・スクリーチによって示唆的に言及されてはいる⁸⁾。だが双方ともほんの数行を割くのみで、詳細にわたって論じてはいなかった。エスキんとスクリーチ以後、研究者はパンタグリュエリオンに影響を与えたものとして「リネラエオン」の名前を挙げ続けてはいるが、スクリーチの部分的な指摘を引き写すのみで独自の研究対象になった形跡はなく、議論は進展しなかったと言えよう。

我々の研究によれば、「リネラエオン」は今まで言われていた以上にラブレーへ大きな影響を与えたものである。まずはここでその作品内容とラブレー『第三の書』の構造との類似点について概観する。「リネラエオン」という作品は、我々の分類によれば以下のような三部構成になっていると言える。

1. 【(ヘラクレスの苦難という) 難問の提示】：主人公の〈自然の女神 *Natura*〉は、万物の創造主として人類に益せんと欲し、その為には何を為すべきかを知るために、運命の女神3姉妹であるバルカエに神託を願い出る。そこで彼女が得たのは、ユピテルの子孫であり全人類の守護者であるヘラクレスに数多の苦難が待ち受けているという不吉な預言であった。彼を救わんがため、〈自然の女神〉は尽力する。襲いかかる怪物たちに対抗するため、棍棒を逃え与えた。だが、ユーノーの憎しみによりもたらされる難行がまだ残っている。

2. 【一連の神託・占いへの行脚と、それらへの失望】：〈自然の女神〉は様々な神託・占いに頼る。例えばアポロンの託宣、プラエネステの籤、テミスの預言などである。だが彼らの言葉はすべて曖昧で晦渋であったので、〈自然の女神〉はこうした神託を無意味で馬鹿げたものと見なし拒絶するに至る。こうして彼女は再び自身でヘラクレスを助力する手段を創りあげることとする。

3. 【(麻とその利用法の発明による) 難題の解決】：役に立たない神託に失望していた〈自然の女神〉は、忠実で誠意ある協力者を欲していたが、〈大地の女神 *Tellus*〉と出会ったのはまさにその時である。〈大地の女神〉は或る植物を共に創造しようと提案する。この植物は或る意味では平凡だが、全人類に有益な霊草であるとのことだったが、これこそがまさに麻である。この神々しい植物は、質素な外観の下に、大いなる有益性を持ち様々な

徳能を秘めている。〈大地の女神〉は自分の弟子である〈窮乏の女神 *Penia*〉を送り込むことで、人間が或る技術を習得するだろうと保証した。これは糸を紡ぎ生地を織る技術であり、これにより船の帆が発明されるだろう。さらに、压榨機で搾れば非常なる薬効ある液体が得られる。この液体は「*Lineleum*（麻の油の意と解せる）」と呼ばれるが、ここからこの作品のタイトルが取られている。アスクレピオスの息子であるマカオンが試練のヘラクレスにこの霊薬を飲ませるであろう。こうしてヘラクレスは苦難を乗り越えて功業を成し遂げ、神となり天の神々と永遠の生を共にすることになる。〈自然の女神〉がこの提案に満足し、計画の実現に向けて急ぎ取りかかるところでこの作品は幕を閉じる。

カルカニーニ「リネラエオン」の持つこの三部構成はラブレール『第三の書』の全体の構造にぴたりと対応していると言える。後者は物語の大枠として以下のような三部構成をもつ：1. 【(パニユルジュによる結婚問題という) 難題の提示】、2. 【一連の神託・占いへの行脚と、それらへの失望】、3. 【実は麻であるパンタグリユエリオンの賛美】。この対応関係を単なる偶然として片づけてしまうには無理があるだろう⁹⁾。以下、双方のテキストとの類似点を探り挙げ比較分析をするが、本稿では上述の第三部、つまり末尾で作品を締めくくる霊草・麻の賛美の箇所について、特に航海術に関わるもののみを検討し、二者間の影響関係と思想的背景を明らかにするための一助とする。

2. 帆布の作成と航海術

この植物は薬として用いられる以外にも様々な力を有していると述べたが、繊維を取り出して糸や織物を作ることによって多様な発明が可能になる。先ずどちらも下準備として、茎の部分から繊維をとって日干しにする。カルカニーニの「リネラエオン」の方は、簡潔かつ密度の高い表現でこのように書かれている：

やり方というのは、絞って麻の筋を棒状にして、太陽の熱でまず綺麗にして準備は完了となるだろう。

*Nam more canabini staminis exurget in stipitem, & soli incendio prima fronte putabitur accommodatum.*¹⁰⁾

それに対してラブレール『第三の書』の方は、独自の植物学の知識を加味して、より詳しく具体的に肉付けされている：

パンタグリユエルが最初に教えてくれたのは、茎から、葉や種を除くことでした。そして、天候が乾燥していれば、流水でなく、よどんだ水のなかに五日間ほど、また、曇りがちで、水が冷たければ、温水に、九日ないし一二日間、漬けるのです。それから日干しして、次いで、日陰で皮をむいて、いわば木質部から、繊維質を分離するのです。先ほども述べたとおり、この草のすべての価値は、繊維質の部分に存在するのでありまして

L'enseignement premier de Pantagruel feut, le tige d'icelle devestir de feuilles et semence : le macerer en Eau stagnante non courante par cinq jours, si le temps est sec, et l'eau chaude, par neuf ou douze, si le temps est nubileux, et l'eau froide : puis au Soleil le seicher : puis à l'ombre le excorticquer, et separer les fibres (es quelles, comme avons dit, consiste tout son pris et valeur) de la partie ligneuse,¹¹⁾

このようにして取り出されたこの植物の繊維は様々な用途に用いられる。「リネラエオン」においては「糸を紡ぎ、糸を編み合わせて織る」とのみあるが¹²⁾、『第三の書』の場合はロープや布、紙、袋など様々な具体的な発明品が付加され増幅される。

こうした用途のうちで共通して最も際立ったものは、麻布で帆を作ることにより可能となる航海術である。「リネラエオン」では〈自然の女神〉に対して協力者〈大地の神〉はこのように語る：

これら [糸と織物] のおかげで、さまざまな民族の間で相互に貿易をしたり、また、遠く離れた土地同士で交流し契約を交わしたり、未開地への扉を開いたりするであろう。

*His [fila et filorum compages] uero & gentium commercia, & terrarum absentium iungentur foedera, & locorum abdita recludentur.*¹³⁾

『第三の書』の語り手も同様の趣意を述べている：

このパンタグリユエリオン草を使用しますれば、それまで〈自然〉によりて、隠蔽され、不可解にして未知の存在とされていた民族なども、こちらに来訪できますし、われわれもまた、彼らのもとを訪問できるようになるのです。

Icelle moyenant, sont les nations, que Nature sembloit tenir absconses, impermeables, et incongneues : à nous venues, nous à elles.¹⁴⁾

人間が創意性を発揮し、恵み豊かな自然の事物を操作して発明した航海術によって、今まで知られていなかった土地と民族と結びつき、人間社会に恩恵をもたらすという発想がここには見てとれる。

3. 『アスクレピオス』の科学技術論

この共通する発想は、我々の意見によれば「ヘルメス文書」の『アスクレピオス』から来ている。この著作はモーセとほぼ同時代人であるヘルメス・トリスメギストスによって著されたものであるとルネサンス時代には信じられており、大きな影響力を持っていた。

実際には紀元後二世紀頃に成立したと推定される¹⁵⁾。この『アスクレピオス』には、人間は叡智を持つ偉大な存在でありながら肉体をまとうという二重性を持ってはいるが、土と水の元素から成り立っており、即ち死すべき身体・物質の身体を備えているからこそ、優れた存在であるという思想が表明されている。人間は肉体を備えているが故に自然界を構成するこれら元素に触れることが出来るのであり、それを加工し製作に供することによって、様々な発明を可能にする。ヘルメス・トリスメギストスは弟子のアスクレピオスにこのように述べている：

今や、可滅的なものという言葉で、土や水を意味してはいない。これら二つの元素は、四大のうちで、自然が人間に隷属させたものではある。だがそうではなく、(水と土においてであれ、あるいはそれを材料にしてであれ、)人間が為す全ての営みのことを意味している。例えば、耕作・牧畜・建築・港湾・航海・通信や相互貿易であり、人類を、そして(土と水で造られた)世界の各地を、この上なく強固に結びつける全ての営みのことである。世界のこの地的部分は、技術と科学とを理解し実践することによって保持されている。すなわち、技術と科学なしに世界が完全であることは許されなかった。これは神の意志によることである。

*modo autem dico mortalia non aquam et terram, quae duo de quattuor elementis subiecit natura hominibus, sed ea, quae ab hominibus aut in his aut de his fiunt, aut ipsius terrae cultus, pascuae, aedificatio, portus, nauigationes, communicationes, commodationes alternae, qui est humanitatis inter se firmissimus nexus et mundi partis, quae est aquae et terrae ; quae pars terrena mundi artium disciplinarumque cognitione atque usu seruatur, sine quibus mundum deus noluit esse perfectum.*¹⁶⁾

この箇所について英訳者のウォルター・スコットは「人間同士の社会的紐帯への言及は『ヘルメス文書』において例外的である」と註を付しており、更に柴田有は「ヘレニズム世界では破格の身体観を唱え」、「古代ヘルメス文書の範囲でも、これほど積極的な身体の評価は珍しい」と評している¹⁷⁾。そして積極的な身体性と共に、我々がここで強調すべきことは、このように自然を操作する人間身体が可能にする科学と技術によって世界が完全になることは、神の意志だとされている点である。物質、大地、そして人類を統一する科学技術は「万物は一」の真理に貢献する¹⁸⁾。科学と技術はこのようにしてヘルメス思想の宇宙論において確固とした位置づけを持つことになる¹⁹⁾。

我々が注目すべきなのは、『アスクレピオス』の宇宙論において肝要となるのが世界各地と人類の繋がりであり、それを可能にする科学技術の代表例として航海術が挙げられていることである。この点を考え合わせると、「ヘルメス文書」の『アスクレピオス』はカルカニーニの「リネラエオン」の典拠の一つとなっており、更にはラブレール『第三の書』のパンタグリュエリオンの背景となっていると言える。

実際、「リネラエオン」の末尾は「相互の繋がりによって、永遠の行路を巡らせよ (*Vertite perpetuos per mutua foedera cursus*)」という謎めいた碑文の記述で終わっているが²⁰⁾、これは『アスクレピオス』に見られる「万物は一」の循環運動と思想基盤を同一にしていると言えるだろう。他方で『第三の書』についてギィ・ドゥメルソンやナタリー・デーヴィスなど様々な論者がこの挿話の内に産業の発展と人間同士の交わり、愛他主義や連帯を見出しているが、こうした見方も『アスクレピオス』に見られる人間紐帯の延長線上に位置づけられる²¹⁾。『アスクレピオス』、「リネラエオン」とパンタグリュエリオン賛美の挿話にはやはり明確な繋がりを読み取れる。

4. マルシリオ・フィチーノによる伝播

ミケラ・マランゴニーが述べるように、カルカニーニはヘルメス思想に通じた神話学者として著名であったので、『アスクレピオス』から影響を受けたことに不思議はないだろう²²⁾。しかしながら、この科学技術に関する知見はヘルメス思想の影響を受けたルネサンスの人文主義者に共有されたものであった。

例えば、「ヘルメス文書」の紹介者であるマルシリオ・フィチーノの思想には、『アスクレピオス』の科学技術論から引き継がれた思想の痕跡が明確に読みとれる。フィチーノは『プラトン神学：一靈魂の不滅について』第十三巻、第三章で、人間の創意性を賛美している。われわれ人間は「自然の奴隷ではない (*non servi simus naturae*)」のであって、自然の事物を用いて、数多くの発明を実現する²³⁾。ここで用いられる自然の事物とは、フィチーノ自身の言葉で「四大元素、鉱石、金属、植物、動物 (*elementia, lapides, metalla, plantas et animalia*)」とされているが、これは即ちアスクレピオスの言う「可滅的なもの」であるとみなすことができる²⁴⁾。フィチーノの科学技術論はそのような事物の物質性によって、様々な発明を可能にする：

[人間は] まさに自らの手段によって食糧、衣服、褥、住居、家具そして武防具を自分自身で造り出した。

*sed ipsemet illa sua copia construit alimenta, vestes, stramenta, habitacula, suppellectilia, arma.*²⁵⁾

羊毛や絹などの様々な織物、絵画や彫刻、建造物を通して、[靈魂は] 自分の才能の力を誇示する。

*quanto polleat ingenio, evidenter ostentat per variam lanificiorum sericique texturam, picturas, sculpturas et aedificia.*²⁶⁾

大地の表面全体を覆う大地の耕作はどれほど驚異的であることか！ 建築や都市の建設はどれほど驚嘆すべきことか！ 水の灌漑はどれほど巧妙であることか！

Quam mirabilis per omnem orbem terrae cultura ! Quam stupenda aedificiorum

*structura et urbium ! Irrigatio aquarum quam artificiosa !*²⁷⁾

そして、その発明品により「[人間は] 大地を踏みしめ、水をかき分け進み、ダイダロスやイカロスの翼は言うまでもなく、高い塔をも用いて、空に昇る (*Terram calcat, sulcat aquam, altissimis turribus conscendit in aera, ut pennas Daedali vel Icarum praetermittam*)」²⁸⁾。フィチーノの語る発明の中には造船術や航海術は明確に述べられてはいないが、「織物」を発明し「水をかき分け進む」と書かれてある通り、そこに含まれているものだと言って良いだろう。このように、ヘルメス思想の伝道者であるフィチーノによって、『アスクレピオス』の科学技術論は、普及していく。

5. 不滅性の獲得

フィチーノが『アスクレピオス』から受け取ったものは自然と科学技術の関係だけではなく、結果として当然その人間観も受容している。『アスクレピオス』において、科学技術の発明を可能にするのは人間の身体性であると述べられていた。フィチーノにおいても、元素界にある人間身体は、物質を操作して発明を可能にするものとして、称揚されている：

諸元素に住み、それを全て用いる者は、諸元素の神である。そして、物質すべてを操作し、変形させて加工する者は、つまりあらゆる物質の神である。これほど数多くこれほど重要な領域において物体へ命令を下す者は、神の位置を占めており、疑いなく不死である。

*Deum quoque esse constitit elementorum qui habitat colitque omnia. Deum denique omnium materialium qui tractat omnes, vertit et format. Qui tot tantisque in rebus corpori dominatur et immortalis Dei gerit vicem est proculdubio immortalis.*²⁹⁾

ここで人間は、物質を支配することによって神に擬えられるほどのものと見做され、不滅性を獲得する。別の箇所ではフィチーノはこのようにも言っている：

[人間は] 天界の力によって天空へと昇って、そこを駆け巡る。超天界の知性によって、天空の更にも上へ昇り詰める。

*Caelesti virtute ascendit caelum atque metitur. Supercaelesti mente transcendit caelum.*³⁰⁾

このように、物質を支配し発明をすることで「天へと昇り」、不死を獲得するという発想が見られるが、この発想は「リネラエオン」に受け継がれ、そしてラプレーのパンタグリュエリオンに影響を与えることになる。

「リネラエオン」では、麻を搾って得られた液体をヘラクレスが飲み、不死になるだろ

うと、〈大地の神〉は述べる：

これを、盃でマカオンがヘラクレスに試練の際に飲ませるだろう。[...] そして [ヘラクレスは] 天空を支配し、ついには不死なる神と共に不死なる時を過ごすだろう。
*quod pocillo Machaon sub periculo Herculi propinabit: [...] caelique potitus tandem immortale cum immortalibus aeuum deget.*³¹⁾

このようにして最終的にヘラクレスは危機を乗り越えて神格化される。ここでカルカニーニが言いたいことは、もちろん麻の油・亜麻仁油が文字通りに神秘的な素晴らしい価値を持っているということではないだろう。むしろ、曖昧で人を欺くような神託や占いという迷信に頼るより、確かな知識に基づいて創意を発揮し自らの手で困難を乗り越える努力をしたほうが良い、ということをも「寓話」(apologus)として説いているのだと考えられる。

同様にラブレーにおいても、パンタグリユエリオンの用法は人間を不死なる神にする可能性を秘めたものとされている。パンタグリユエリオンの持つ驚異的な特質を目の当たりにしたオリュンポスの神々は、このように叫ぶ：

パンタグリユエルの子供たちにより、ひょっとすると、似たようなエネルギーを秘めた植物が発見されるかもしれぬぞ。すると、この草のエネルギーを使って人類は、電やあられの源を、雨の流し口を、雷の発電所を訪れることができよう。そしてまた、月世界にも侵入するだろうし、星座の領土にも入って行って、[...] そしてだ、人類は、われらとともに食卓に座って、われらが女神を妻にめとるかもしれないぞ。それが、神々の列に加わるための、唯一の方法なのだからな。

Par ses enfans (peut estre) sera inventée herbe de semblable energie : moyenant laquelle pourront les humains visiter les sources des gresles, les bondes des pluyes, et l'officine des fouldres : pourront envahir les regions de la Lune, entrer le territoire des signes celestes [...] : s'asseoir à table avecques nous, et nos Déesses prendre à femmes, qui sont les seulx moyens d'estre deifiez.³²⁾

積極的な身体性、物質的操作、そして人間の神格化、これらフィチーノとカルカニーニに共通するヘルメス思想を背景とした科学技術論に着想を得て、ラブレーはパンタグリユエリオンの挿話を書いたと言える。

6. プリニウスとポリドーロ・ヴィルジリオ：帆布の二重性

カルカニーニとラブレーの麻とその使用法に関する蘊蓄は、まず紀元後一世紀に活動したプリニウスの博物誌から来ているものだが、プリニウスだけでは説明できないものも多く、唯一の典拠と言うことは出来ない。例えば不燃性のパンタグリユエリオンの産出地は、プリニウスにおいてはインドにある灼熱の砂漠であるとのみ書かれているが³³⁾、ラブレー

においてはカルパシアとディア・シエネ気候下の地域であるとされている³⁴⁾。ジャン・セアールが注釈において述べている通り、プリニウスには存在しないこのカルパシア産出という情報をラブレーがどこから得たのかは不明とされている³⁵⁾。ルネサンス作家は引用の織物として著作を著すことが多いが、なかでも特にラブレーは、単に引用を継ぎ接ぎするのではなく、上述の例に見られる通り独特の重ねあわせ方で重層的な作品を創作する。パンタグリュエリオンの挿話は、プリニウス以外にも、カルカニーニの「リネラエオン」や、その背景となるヘルメス思想の自然観と人間観、そして科学技術論を踏まえて読解すべきであると考えられる。

ここでプリニウスとの関連において重要なのは、帆によって航海を可能にする麻への評価が正反対となっていることである。プリニウスにおいては、帆によって航海を可能にする麻は、人類を危険に晒す呪われるべきものと見做されていた：

航海術の発明者 […] には、どんなに呪いをかけても足りない。その発明者は、人間が陸上で死ぬことに満足せずに、埋葬もできないところで滅ぶことを望んだのだ³⁶⁾。

また、当時非常に読まれ、ラブレーも確かに参照しているポリドーロ・ヴィルジリオ（ポリドーア・ヴァーヅル）の『諸々の発明者たちについて』においても同様の呪詛が見られる：

麻は幾千もの用途があるが、特に帆を作るのに向いていて、そのためにこそ人類への害悪として呪われるに値する。[…] これに関してプリニウスが言うには、この発明者にはどれほどの呪詛が十分であるか知るの難しい、とのことだ³⁷⁾。

このように先行テキストが下す麻への批判をもとに、エドウィン・デュヴァルはパンタグリュエリオンの否定的評価を強調し、最終的に否定的とも肯定的とも言えない作品の多義性とアポリアを主張する³⁸⁾。他方でマイケル・スクリーチは、ある時期まで、パンタグリュエリオンの挿話は黒を白と、悪魔を天使と言いつける悪しきレトリックの例である、と見做していた³⁹⁾。

しかしながらこれまで見てきた通り、麻が可能にする帆と航海は神が世界を完全にするために望んだ科学技術の発展を表す代表例なのであり、間テキストによって不吉な評価が重なることがあったとしても、最終的には肯定的なものとして捉えるべきであると考えられる。ジャン・セアールの示唆するとおり、『第三の書』において理想的な賢人王として描かれる主人公パンタグリュエルに因んだ名を持つパンタグリュエリオンを解釈するためには、その名前の価値を考えねばならない⁴⁰⁾。

実際に、先ほど言及したポリドーロ・ヴィルジリオは、帆による航海へ呪詛を投げかけた後に、その最初の発明をノアの方舟に見出し、「この神聖で欠点のない」人物であるノアのお陰で世界に人類の居住地が広がっていったと、この発明を賞賛している：

だが私は、ノアにこの発明を帰するほうがよほどもっともらしくかつ適切であると

考える。[…] この神聖で欠点のない男は、神が人類を滅ぼすべく洪水を起こすだろうと気付いた時に、水の猛威を避けるため、自ら木で箱舟を作った […]。それゆえ、航海術と造船術の実践はまずノアから生まれたと考えるのは故ないことではない。というのも、彼より以前に海に挑んだ者の記録はないからであり、さらにはとりわけ、またあのフラウィウス・ヨセフスが言うように、ノアの子孫は多くの船を用いて、住むべき地上の様々な地域を求めて旅立ったからである⁴¹⁾。

普通に読むと論理的に一貫しないことを書いているわけだが、ジャン・セアールはここに発明のモラルといったものを読み取る。つまり、発明という行為は、必然的に伴うリスクを引き受けながら、善用すればもたらされる利益を得るために人間が自由に創意を発揮することである、ということである⁴²⁾。

このように、最終的に肯定へと向かう二重性という特徴は、パンタグリュエリオンの挿話の帆と航海術への評価と重なるものであるが、ラブレー作品全体の本質的なところと共通するものであると考えられる。

7. おわりに

ラブレーは『アスクレピオス』やフィチーノのヘルメス思想を背景として、カルカニーニの「リネラエオン」を骨組みに、ポリドーロ・ヴィルジリオの発明論などを接ぎ木してパンタグリュエリオンの挿話をもした。彼ら全てはルネサンスのヘルメス思想の科学技術論を共有していると言える。そこでは、帆と航海術という発明は、不吉なものとして二重になりながらも、肯定的なものへと向かっていると考えられる。

ここでは紙幅の都合で言及することが出来なかったが、パンタグリュエリオンにおける科学技術の重要性に関しては、ハインリッヒ＝コルネリウス・アグリッパ・フォン・ネットスハイムの科学的魔術論の影響を検討しながら、パンタグリュエリオン賛美と対照をなす『第三の書』冒頭のパニユルジュの借金賛美の挿話や、『第四の書』におけるガステルの挿話などと比較することでより明確になると考えられるが、これらについては稿を改めて論じたい。例えばここで一点のみ指摘しておくなら、フィチーノは上述の神的人間を評して「[[素材となる自然物を] すべて用いて、あたかも万物の支配者のようである (*sed utitur omnibus, quasi sit omnium dominus*)」と述べているが、これはラブレーのガステルが「世界一の技芸師範 (*premier maistre es ars du monde*)」であることと無関係ではないだろう⁴³⁾。いずれにせよ、今まで名のみ知られて実際には殆ど読まれることのなかった「リネラエオン」と比較しつつ、パンタグリュエリオンの挿話をヘルメス思想の科学技術論から考察するという当初の目的は達せられたと考える。そこで導き出される挿話の解釈は、ルネサンスにおける科学技術の発展と人類の進歩の賛美という余りに伝統的な解釈と軌を一にし過ぎていると思われるかもしれない。だが伝統的な見方は、斬新な解釈と同様に、修正すべき点もあれば道理がある点もあるだろう。本論が新たな角度から再検討するための一助となれば幸いである。

〔注〕

- 1) Verdun-Louis Saulnier, « L'Énigme de Pantagruélion, ou Du *Tiers* au *Quart livre* », in *Études Rabelaisiennes* (=ÉR) 1, Genève, Droz, 1956, p. 54.
- 2) ラブレール『第三之書』渡辺一夫訳, 岩波文庫, 1974年, 「解説」, p. 488 *sqq.*
- 3) François Rigolot, « Rabelais's Laurel for Glory : A Further Study of the "Pantagruelion" », in *Renaissance Quarterly*, vol. 42, n° 1, printemps 1989, pp. 60-77 ; Rabelais, *Œuvres complètes*, éd. Mireille Huchon, Gallimard, 1994 (=Œ. C.), n° 4, p. 509 ; Louis-Georges Tin, « Qu'est-ce que le pantagruelion », in *ÉR* 39, Genève, Droz, 2000, p. 129. 更に近年では折井穂積がこの霊草を人間的世俗知とその限界の暗喩と見做し, それに対置する霊草の不燃性はキリストの叡智の称揚であると読み解く論考を発表した。Voir Orii Hozumi, « Panurge's Quest and the Sixteenth-Century Idea of the Labyrinth », in *Studi Francesi* 177 (59-3), septembre-décembre, 2015, pp. 450-464. ここで我々は挿話の網羅的な書誌を作成することを目標としていない。
- 4) Romain Menini, « Rabelais lecteur de Celio Calcagnini », in *Les Langues et les langages dans l'œuvre de Rabelais*, *ÉR* 59, dir. Franco Giaccone et Paola Cifarelli, Genève, Droz, 2020, p. 140 et n. 3.
- 5) Richard Cooper, *Rabelais et l'Italie*, Genève, Droz, 1991, p. 25.
- 6) カルカニーニの伝記として最も簡便なものに Quirinus Breen, « Celio Calcagnini (1479-1541) », in *Church History*, vol. 21, n° 3, Septembre 1952, pp. 225-238 が挙げられる。
- 7) 特に近年ではRomain Meniniが精力的にカルカニーニのラブレールへの影響を論じているが, 「リネラエオン」については触れていない。Voir Romain Menini, *Rabelais altérateur : "Graeciser en François"*, Classiques Garnier, 2014 ; *id.*, « Rabelais lecteur de Celio Calcagnini », *op. cit.*
- 8) Stanley Eskin, « Physis and Antiphysie : The Idea of Nature in Rabelais and Calcagnini », in *Comparative Literature*, vol. 14, n° 2, printemps 1962, p. 169 ; Michael Screech, « Celio Calcagnini and Rabelaisian Sympathy », in *Neo-Latin and the Vernacular in Renaissance France*, dir. Graham Castor et Terence Cave, Oxford, Oxford University Press, 1984, pp. 30-31 ; *id.*, *Rabelais* [1979], trad. Marie-Anne de Kisch, Gallimard, 1992, pp. 375-376 [邦訳: マイケル・スクリーチ『ラブレール: 一笑いと叡智のルネサンス』平野隆文訳, 白水社, 2009年, pp. 546-548].
- 9) Cf. Kenichi Sekimata, *Rabelais et la magie*, thèse de doctorat, Université Paris-Sorbonne (Paris IV) , 2015, partie I, chap. II, « La Magie naturelle, autour du pantagruélion », pp. 114-208.
- 10) Celio Calcagnini, *Linelaeon*, in *Opera aliquot*, Bâle, Froben, 1544, p. 615. 「リネラエオン」からの邦訳引用は全て拙訳。
- 11) Rabelais, *Tiers Livre*, chap. L, *Œ. C.*, pp. 502-503 ; ラブレール『第三の書』宮下志朗訳, ちくま文庫, 2007年, p. 516. ラブレールからの邦訳引用は以下全て宮下訳を用いたが,

論旨に合わせて表記を変更した箇所がある。

- 12) Calcagnini, *op. cit.*, p. 615.
- 13) *Ibid.*
- 14) *Tiers Livre*, chap. LI, *Œ. C.*, p. 508 ; 前掲宮下訳, pp. 535-536。引用中の〈自然〉が原文では大文字で始まり無冠詞であり, 〈自然の女神〉の意であるとも解せることに着目すべきである。
- 15) 柴田有「ヘルメス思想の源流：—『アスクレピオス』の自然哲学とその周辺」, 『技術・魔術・科学』, 岩波書店, 1986年, pp. 86-87。
- 16) Hermès Trismégiste (auteur prétendu), *Corpus Hermeticum*, t. II, *Traité XIII-XVIII, Asclepius*, éd. Arthur Darby Nock et André-Jean Festugière, Les Belles Lettres, 1945 ; 4^e éd., 1983, p. 306。邦訳引用は, 柴田有の部分訳 (*op. cit.*, pp. 95-96) とフェステュジエールの仏訳に大きく依拠しながら拙訳。本論文における引用文中の下線強調は全て引用者による。
- 17) *Hermetica. The Ancient Greek and Latin Writings Which Contain Religious or Philosophic Teachings Ascribed to Hermes Trismegistus*, texte édité, traduit et annoté par Walter Scott, Oxford, Clarendon Press, vol. 3, 1926, p. 52 ; 柴田有, *op. cit.*, p. 95.
- 18) 柴田有, *op. cit.*, pp. 92-95.
- 19) これらの点には, フェステュジエールの言うオプティミスト的傾向のヘルメス思想を読みとることができるだろう。Voir André-Jean Festugière, *La Révélation d'Hermès Trismégiste* [1944-1954], Les Belles Lettres, t. I, *L'Astrologie et les Sciences occultes* [1944], p. 84 ; t. II, *Le Dieu cosmique* [1949], pp. X-XI.
- 20) Calcagnini, *op. cit.*, p. 615.
- 21) Guy Demerson, *Rabelais*, Balland, 1986, p. 232 ; ナタリー・Z・デーヴィス『贈与の文化史：—16世紀フランスにおける』宮下志朗訳, みすず書房, 2007年。Cf. 宮下志朗「解説」, 前掲『第三の書』, pp. 586-587。
- 22) Michela Marangoni, *L'Armonia del sapere. I Lectionum antiquarum libri di Celio Rodigino*, Venise, Istituto veneto di scienze, lettere ed arti, 1997, p. 98.
- 23) Marsile Ficin, *Theologia platonica de immortalitate animae* [1482], livre XIII, chap. II, trad. par Raymond Marcel, *Théologie platonicienne de l'Immortalité des Âmes*, Les Belles Lettres, [3 t., 1964-1970] t. II, 1964, p. 223。フィチーノからの引用は全てラテン語原文を参照しながらレーモン・マルセルの仏訳を土台に拙訳。
- 24) *Ibid.*, p. 224.
- 25) *Ibid.*
- 26) *Ibid.*
- 27) *Ibid.*, p. 225.
- 28) *Ibid.*, p. 224.
- 29) *Ibid.*, p. 225.

- 30) *Ibid.*, pp. 224-225.
- 31) Calcagnini, *op. cit.*, p. 615. ここに登場するマカオンとはギリシア神話中の人物で、医神アスクレピオスの子である。「ヘルメス文書」の『アスクレピオス』は表題をヘルメス・トリスメギストスの対話相手である作中登場人物のアスクレピオスから採っているが、この「ヘルメス文書」中のアスクレピオスは医神アスクレピオスの子孫である (voir Hermès Trismégiste, *Asclepius*, éd. cit., 1984, p. 347)。カルカニーニはここで自著「リネラエオン」と「ヘルメス文書」の『アスクレピオス』との繋がりを暗示しているのだろうと考えられる。
- 32) *Tiers Livre*, chap. LI, *Œ. C.*, p. 509 ; 前掲宮下訳, pp. 537-538.
- 33) Pline l'Ancien, *Histoire naturelle*, texte établi, traduit et commenté par Jacques André, Les Belles Lettres, 1964, livre XIX, IV, 19, p. 30.
- 34) *Œ. C.*, p. 510 ; 前掲宮下訳, p. 542.
- 35) *Tiers Livre*, éd. Jean Céard, in *Cinq Livres*, éd. Jean Céard, Gérard Defaux et Michel Simonin, Librairie générale française, coll. « La Pochothèque », 1994, n. 8, p. 864. この問題については稿を改めて論じたい。
- 36) Pline l'Ancien, livre XIX, I, 6, éd. cit., p. 25. 邦訳引用は仏訳を参照しつつラテン語からの拙訳。ただし本節においてはラプレーとの直接的な影響を（特に表現の比較を通して）論証することを目的としていないため、ラテン語原文を引用しない。
- 37) Polydore Vergil [Polidoro Virgilio], *On Discovery*, éd. Brian Copenhaver, Cambridge, Harvard University Press, 2002, p. 392. 邦訳引用は、Copenhaverの英訳と François de Belleforest (*Les Memoires et Histoire de l'Origine, Invention & Autheurs des Choses*, Robert Le Mangnier, 1576, pp. 286-287) の仏訳を参照しつつ、ラテン語からの拙訳。上述のプリニウス引用文と同様、ヴィルジリオのラテン語原文は引用しない。ポリドーロ・ヴィルジリオという名前の日本語表記はラテン語風のポリドールス・ウェルギリウスや英語風のポリドア・ヴァージルなども見られる。ラテン語作家であったことや、イギリスに渡り英国史を著したため英語圏での受容・研究が盛んであることを反映しているのだと思われるが、ここではイタリア人であることを鑑みて原音主義に従いポリドーロ・ヴィルジリオと表記する（イタリア原音主義でもヴィルジリという呼び名も可能である）。
- 38) Edwin Duval, *The Design of Rabelais's Tiers Livre de Pantagruel*, *ÉR* 34, Genève, Droz, 1997, pp. 210-211.
- 39) Michael Screech, « Introduction » au *Tiers Livre*, in *Rabelais, Tiers Livre*, éd. Michael Screech, Genève, Droz, 1964, p. XXII (Cf. *ibid.*, n. 136, p. 345). この解釈は1964年時点でのものであり、その後1979年の『ラプレー』ではスクリーチも「リネラエオン」の影響に着目し、パンタグリユエリオンの肯定的な側面を認めている。上に「ある時期まで」との但し書きを付けたのは、即ち1964年から1979年の間のどこかの時期まで、ということになるが、おそらくはそのどこかで1962年に発表されたエスキンの論文を読みカルカニーニへの関心を深めたのだと予想される。

- 40) *Tiers Livre*, éd. cit., coll. « La Pochotèque », 1994, n. 10, p. 856.
- 41) Polydore Vergil [Polidoro Virgilio], éd. cit., p. 466.
- 42) Jean Céard, « Inventions et Inventeurs selon Polydore Vergile », in *Inventions et Découvertes au Temps de la Renaissance*, éd. Marie-Thérèse Jones-Davies, Klincksieck, 1996, pp. 109-122, surtout p. 115.
- 43) Marsile Ficin, *op. cit.*, p. 224 ; *Œ. C.*, p. 671 ; ラブレール『第四の書』宮下訳, ちくま文庫, 2009年, p. 468.

(Abstract)

Cet article a pour but de comparer l'éloge du pantagruélien dans le *Tiers livre* de Rabelais avec celui du lin développé dans la chute du *Linelaeon* de Celio Calcagnini et de mettre ainsi au jour une influence exercée par l'hermétisme sur leurs hymnes à l'ingéniosité humaine.

Les éloges se montrent proches l'un de l'autre, d'abord dans la description qu'ils font des préparatifs nécessaires à la fabrication du fil, de la toile et de la voile à partir du lin. Ensuite, les éloges louent les bienfaits de la voile, inventée par l'ingéniosité humaine, qui sert à la navigation, à la découverte de terres lointaines et à la communication entre elles. Les arts et les sciences contribuent au parachèvement de la société.

À notre avis, Calcagnini puise dans l'*Asclepius*, un des traités les plus remarquables dans les *Hermetica*. Selon Hermès Trismégiste, l'homme se distingue par son corps mortel qui lui permet de manipuler les éléments et de faire naître les inventions, telles que la navigation et les échanges mutuels, afin de satisfaire à la volonté de Dieu. On peut trouver un écho de cette doctrine entre autres dans la *Theologia platonica* de Marsile Ficin. Leurs textes s'accordent enfin à mettre en avant l'immortalisation de l'homme réalisable grâce à la matérialité du corps humain et à l'ingéniosité humaine.

Certains chercheurs avaient tendance à considérer le pantagruélien comme sinistre, en se réclamant de la malédiction jetée par Plin l'Ancien et Polydore Vergile sur la voile et la navigation dangereuse. Mais notre analyse comparative amène à dire que notre plante serait louable au mépris des évaluations négatives.